



TITLE:

黄巾の亂と傳統の問題

AUTHOR(S):

福井, 重雅

CITATION:

福井, 重雅. 黄巾の亂と傳統の問題. 東洋史研究 1975, 34(1): 24-57

ISSUE DATE:

1975-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153573>

RIGHT:

黄巾の亂と傳統の問題

福井重雅

目次

はじめに

一 黄巾の亂と地域の關係

(一) 冀州の黄巾と青徐二州の黄巾

(二) 青州の黄巾とその意義

二 黄巾の亂と傳統の關係

(一) 青州の範圍とその傳統

(二) 黄巾の亂に見られる地方の傳統

おわりに

はじめに

歴史におけるさまざまな變革の問題を考察の対象とするとき、革新にとりもなう傳統という並立する命題は、時間と空間とを問わず、つねに潜在的に付隨する根本的な研究課題の一つであろう。そうした變革を代表する具體的な一例として反亂をとりあげることができるとするならば、一方ではそこに露呈する各種の革新的な動向を模索するとともに、他方ではまたそれに表裏する問題として、そこに内在する一連の傳統的な趨勢をも同時に究明しなければならないはずである。

黄巾の亂に關する研究は、後漢末期の社會史的な分析や原始道教の成立史的な考察を中心として、これまで數多くの注

目すべき成果を産み出してきている。^⑤しかしそれらの多くの論文の中で從來必ずしも十分に検討されていないことも重要な問題の一つは、革新を求めるこの反亂の中に、一體いかなる傳統が投影しているかというテーマであろう。ある時代にある地方を背景として一つの反亂が起る場合、いうまでもなく一方ではその時代の内包するさまざまな複雑な局面がそこに一時的に集約されてくるものであるが、またそれと同時に他方ではその地方の維持するいくつかの特殊な側面がそこに傳統的に潜在している場合が少なくない。逆にいえば後者のようないわば特定の地方の傳統が、その反亂を發生させ擴大させた重要な因子を形成し、特定の時代の反亂に獨得の色彩や形態をあたえることもありうるはずである。中國古代史上、最大の反亂の一つに數えられる黃巾の亂の中にも、そのような地方的な傳統のもつ一種の獨自性を見出すことができるのではなからうか。

小論はこのような觀點からあらためて黃巾の亂をとりあげ、まず最初に黃巾の亂とそれが發生した地域との關係を考察することによって、ある一定の地方のもつ意義を評價し、次にその地方に存續する傳統的な諸要素を重視しつつ黃巾集團の思想や組織の一端を概観し、最後に黃巾の亂のもつ二三の特色を分析することによって、そこに見られる地方的な傳統の問題を再検討することにした。

しかしながらこのような分野の課題を究明するためには、黃巾の亂に関する基本的な素材は質量ともに必ずしも十分ではなく、またそこにいわば爲政者側の書き遺した記録のもついくつかの不備のあることも否定できない。^⑥しかしそれらの數少ない制約された史料の中で、黃巾の亂の始末をもっとも具體的に傳へ遺している記述は、周知のように後漢書卷一〇一皇甫嵩傳（以下書名と卷數を省略して皇甫嵩傳とのみ略稱）に見える次の一節である。

初鉅鹿張角、自稱大賢良師、奉事黃老道、畜養弟子、跪拜首過、符水呪說以療病、病者頗愈、百姓信向之、角因遣弟子八人、使於四方、以善道教化天下、轉相誑惑、十餘年間、衆徒數十萬、連結郡國、自青徐幽冀荆揚兗豫八州之人、莫不畢應、遂置三十六方、方猶將軍號也、大方萬餘人、小方六七千、各立渠帥、訛言蒼天已死、黃天當立、歲在甲子、

天下大吉、以白土書京城寺門、及州郡官府、皆作甲子字、中平元年、大方馬元義等、先收荆揚數萬人、期會發於鄴、元義數往來京師、以中常侍封請徐奉等、爲內應、約以三月五日、內外俱起、未及作亂、而張角弟子濟南唐周、上書告之、於是軍裂元義於洛陽、靈帝以周章下三公司隸、使鉤盾令周斌、將三府掾屬、案驗宮省直衛、及百姓有事角道者、誅殺千餘人、推考冀州、逐捕角等、角等知事已露、晨夜馳救諸方、一時俱起、皆著黃巾爲標幟、時人謂之黃巾、亦名爲蛾賊、殺人以祠天、角稱天公將軍、角弟寶稱地公將軍、寶弟梁稱人公將軍、所在燔燒官府、劫掠聚邑、州郡失據、長吏多逃亡、旬日之間、天下響應、京師震動。

以下この記述を中心として黃巾の亂のいくつかの問題を検討して行くことにするが、まず最初に右の文を一讀してただちに注意されることは、如上の黃巾の亂の推移の中に次のような二つの重要な特色が見出されるということである。

その第一の點は、黃巾集團がその反亂の發生する以前からすでに相當の準備期間と勢力範圍とをもち、それらを基盤として擧兵しているという事實である。すなわち張角らはまず最初に自らの確立した太平道とその教團組織を利用することによって、時間的には「十餘年間」という歲月をかけ、地理的には「郡國に連結す」という版圖を擁した結果、「數十萬」の「衆徒」を集め、「三十六方」の集團を編成し、それらを基礎として亂を起している。このことは反亂の以前から黃巾がすでに強力な運動を展開していたということを示すものであり、その一例として後漢書卷八四楊賜傳に次のような記録が見出される。

先是黃巾帥張角等、執左道稱大賢、以誑耀百姓、天下縉負歸之、賜時在司徒、召掾劉陶告曰、張角等、遭赦不悔、而稍益滋蔓、今若下州郡捕討、恐更騷擾、速成其患、且欲切敕刺史二千石、簡別流人、各護歸本郡、以孤弱其黨、然後誅其渠帥、可不勞而定。

後漢書卷八靈帝紀によると、楊賜が光祿勳から司徒に昇進したのは光和二年（一七九）の十一月のことであり、その位を退いたのは同四年秋のことであるから、この對黃巾の鎮撫策が立案されたのは、亂の起る中平元年（一八四）より三四

年前のことになる。しかもそこには「張角らは赦に遭うも悔いず、而も稍々益々滋蔓す」とあるから、その當時までに張角はすでに少なくとも一度は弾壓を受け、のちに赦免されたが、なお依然として勢力を擴張していたことが推測される。そして「今もし州郡に捕討を下せば、恐らくは更に騷擾して速かに其の患を成さん」と危惧しているほどであるから、當時の黃巾集團はもはや容易な弾壓によっては解體しがたいほどの強大な存在に發展していたことがわかる。このような舉兵以前の張角らの動向は後漢書卷八七劉陶傳などにも見出されることであるが、黃巾の亂はいわばそうした多年にわたる地下活動と各地におよぶ動員勢力とを背景とし、しかもあらかじめ起義の日時や口號までを準備した上で、一齊に蜂起した反亂であつたといふことができる。このことは單に漢代のみではなく、中國古代史上に發生した大小無數の反亂の中で、とくに黃巾の亂を特色づける一つの重要な要素となつてゐるといふてよいであらう。

しかしそれと同時に注意しなければならない第二の點は、黃巾集團がそうした周到な準備や綿密な計劃をもつて蜂起したはずであるにもかかわらず、張角を首領とする集團は意外にも脆弱で、その主力的な部隊は一見して簡単に短時日のうちに平定されてしまつてゐるという事實である。この間の經緯を略述する後漢書靈帝紀を見ると、

中平元年春二月、鉅鹿人張角、自稱黃天、其部師有三十六萬、皆著黃巾、同日反叛、……多十月、皇甫嵩與黃巾賊戰于廣宗、獲張角弟梁、角先死、迺戮其屍、以皇甫嵩爲左車騎將軍、十一月、皇甫嵩又破黃巾于下曲陽、斬張角弟寶、……十二月己巳、大赦天下、改元中平。

とあるように、黃巾の亂は中平元年の二月に勃發したが、早くもその年内の十一月には鎮定されてしまつてゐる。右の史料の末尾に見える「天下に大赦して中平と改元す」という一文は、皇甫嵩傳によると「黃巾の既に平らぐるを以ての故に年を改めて中平と爲す」と明記されているから、この年時の改元が黃巾の亂の平定を記念するものであつたことは疑いない。しかし周知のように黃巾の亂は張角の死をもつて終りを告げたわけではない。後漢書卷九七黨錮傳の序文に「其の後黃巾遂に盛んにして朝野崩離す」と述べられてゐるように、黃巾の亂はその指導者の死後もなお衰えを見せることなく、

その後約二十年の長きにわたって根強い抵抗をつづけ、ついに實質的に後漢という一王朝を崩壊せしめるにいたる強大な反亂に發展して行くことになるのである。このこともまた單に漢代のみではなく、中國古代史上に興亡した各種多様な反亂の中で、とくに黃巾の亂を印象づける一つの注目すべき要素となっているといつてよいであろう。

このような反亂の推移の中に見られる二つの重要な特色に注意するとき、そこに當然疑問として生ずる問題は、張角を中心とする黃巾とそれ以降の黃巾とは一體どのような關係にあり、しかもそれらは反亂全體の進展の中で個々にどのような役割を演じ、どのような位置を占めていたかという點であろう。小論が黃巾の亂を考えるにさいして張角死後の黃巾の存在を重視し、それを地域との關連によって把握しようとする意圖はここにあり、まず最初にこの問題を檢討することから論を進めることにしたい。

一 黃巾の亂と地域の關係

(一) 冀州の黃巾と青徐二州の黃巾

黃巾の首領である張角は、前掲の後漢書皇甫嵩傳や靈帝紀をはじめとして、同劉陶傳や袁宏の後漢紀などに、いずれも「鉅鹿の(人)張角」と明記されているから、その出身が鉅鹿であったということは疑いない。續漢書第二〇郡國志を見ると、この鉅鹿は冀州に屬する郡の一つであり、同第一七五行志に「中平元年に到りて張角の兄弟は兵を冀州に起す」と記されているのは、いうまでもなくその出自を州名によって表現したものである。この冀州はその州内に趙國や魏郡を置いていたことから明らかなように、かつて先秦時代には趙や魏に屬する地方であり、のちに三國魏の時代には魏郡として再編成された地方であった。後漢書卷八八傅燮傳に「今張角は趙魏より起る」といい、三國志吳書卷一孫堅傳に「黃巾の賊帥張角は魏郡より起る」といっているのは、いずれもこの冀州の地方を新舊の地名によってよんだものであろう。事

實、上掲の靈帝紀を見ると「皇甫嵩、黃巾の賊と廣宗に戦い、張角の弟梁を獲、角先に死す」とあり、また「黃巾を下曲陽に破り、張角の弟寶を斬る」とあるが、張角ら三人の兄弟が戦病死したとされる廣宗と下曲陽は、さきの續漢書郡國志によると、いずれも冀州の鉅鹿郡の中に置かれた縣である。これらの事實によって、黃巾の亂が冀州の鉅鹿を中心にした反亂であったということは、あらためて指摘するまでもないことであろう。

しかしここで注意しなければならないことは、張角を首領に推戴しているとはいえ、冀州の黃巾はあくまでも黃巾勢力の一部にすぎないということである。換言すれば、冀州の黃巾のみがほぼ唯一の主体的な集團であって、それ以外の各地に散在する黃巾はいわばその後發的な集團であったということではない。しかし從來の二三の研究によると、張角の本貫は冀州の鉅鹿であり、そこを根據地として太平道の教法が發達し各地に傳播したために、それと同様に黃巾の亂もまず最初に鉅鹿に起り、それが諸州に波及して蹶起を促したというように考えられている。あるいはまた黃巾の亂は張角の死を境として、それ以前をその主流や正統的な黃巾であると規定し、それ以後をその末流や餘黨的な黃巾であると想定する見解もある^⑨。このようないわば本末的な評價が可能であるとするならば、逆にまた黃巾の亂全體の推移の中で、張角の指揮する冀州の黃巾はその尖兵的な存在にすぎず、むしろそれ以降の黃巾の勢力こそその主体的な集團であったと解釋することはできないであろうか。

このような觀點からあらためて續漢書第一三五行志を見ると、「黃巾の賊は先ず東方に起り、庫兵大いに動く」とあり、また三國志魏書卷八張魯傳所引の典略を見ると、「光和中、東方に張角あり」とあるように、黃巾の亂はまず「東方」で起ったと記されていることに注意される。そして皇甫嵩傳に詳述されているように、黃巾の信徒は舉兵以前にすでに「郡國に連結し、青・徐・幽・冀・荆・揚・兗・豫の八州よりの人、ことごとく應ぜざるはなし」という盛況であったという。同様に續漢書第一七五行志に「山東の七州處々（張）角に應ず」といい、後漢書傳變傳に「今張角は趙魏より起り、黃巾は六州に亂す」というなど、その規模は「八州」・「七州」・「六州」の廣きにおよんだことが知られる。しかも皇甫嵩

傳に「(張)角ら事の已に露われたるを知り、晨夜救を諸方に馳せ、一時に俱に起つ」と見えるように、それら諸州の黃巾は張角の舉兵と同時に一齊に蜂起したのである。このことは別のいくつかの史料によっても裏付けられることであって、例えば後漢書靈帝紀には「其の部師に三十六萬あり、皆な黃巾を着けて同日に反叛す」とあり、また三國志孫堅傳には「三十六萬、一旦に俱に發す」とあり、さらに續漢書第一四五行志には「七州二十八郡、同時に俱に發す」とあるように、各地に蟠踞していた黃巾は最初から張角の起義と時を同じくして、一齊にその舉兵に呼應したということに注意しなければならない。

ここにいう東方とは地理的にどのような地方を指し、七州や六州が具體的にどのような州を含めて數えるかという問題は、必ずしも明らかではないが、黃巾の亂が中國東方の黃河下流地帶の數州にわたって發生した大亂であつたということは、以上のような各種の史料によって證明されることであろう。したがって冀州の黃巾もこのような數州にわたる黃巾勢力の一部であると見なすべきであり、黃巾の亂が舉兵後の短時日のうちに平定されてしまつてゐるといっても、それはあくまでも首領の張角とその指揮する冀州の黃巾が潰滅したというにすぎない。換言すれば、張角の死後もその特定の後繼者の名を歴史に遺すことなく、依然として結集して強力な抵抗を維持することができたのは、このような冀州以外の各地に跋扈する有力な黃巾の存在があつたからである。それではそれら諸州の黃巾の中でもっとも有力な存在は一體いかなる地方に見出すことができるであらうか。

このような意圖から後漢書や三國志を仔細に點檢してみると、ここであらためて注目される事實は、そうした廣範な地域に分散していた黃巾の中でもっともその勢力が強く、反亂の猖獗をきわめていた地方が、青州と徐州の二州であつたということである。いま試みに後漢書の中からその年時のほぼ明らかな事例のみをとりあげて、それらを年代順に整理して列記してみると、次のような八例を擧げることができる。

(一) (中平五年) 冬十月、……青徐黃巾復興。(卷八靈帝紀)

- (一) (初平元年) 青徐士庶、避黃巾之難、歸(劉)虞者、百餘萬口。(卷一〇三劉虞傳)
- (二) (初平二年) 青徐黃巾三十萬衆、入渤海界、欲與黑山合。(同公孫瓚傳)
- (三) (初平二年) 十一月、青州黃巾寇太山、……黃巾轉寇渤海。(卷九獻帝紀)
- (四) (初平三年) 青州黃巾賊入兗州、殺任城相鄭遂、轉入東平。(卷一〇四劉寵傳)
- (五) (初平三年) 夏四月、……青州黃巾擊殺兗州刺史劉岱於東平。(獻帝紀)
- (六) (初平四年) 會徐州黃巾起、以(陶)謙爲徐州刺史、擊黃巾大破走之。(卷一〇三陶謙傳)
- (七) (建安元年、自徐州還高密道、遇黃巾賊數萬人。(卷三五鄭玄傳)
- (八) 以上の八例のうち青州と徐州とをそれぞれ別個にして数えらるゝと、前者が六例、後者が五例ということになる。このように州名を冠してよばれた黄巾の例が、後漢書の中では他に靈帝紀に見える「益州の黄巾」と同卷六一羊續傳に見える「揚州の黄巾」の一例ずつであるという事實と比較するとき、青徐の二州がいかに黄巾の席捲していた重要な地方であつたかということが判然とするであらう。

事實、皇甫嵩傳によると、張角らは「三月五日を以て内外俱に起たんことを約」していたが、「未だ亂を作すに及ばざる」うちに、「張角の弟子の濟南の唐周が上書してこれを告」げたために、官憲の手のおよぶ前に急遽して兵を擧げたということになっている。ここにいう唐周の出身地である「濟南」は、續漢書第二二郡國志によると、青州に屬する郡の一つであるから、東方の各州に一齊に蜂起した多數の黄巾の存在と考え合わせると、張角の影響が擧兵以前の段階からすでに青州にまでおよんでいたという情勢が察知される。また後漢書卷八〇明帝八王傳中の下邳王傳を見ると、「中平元年、(劉)意黄巾に遭い、國を棄てて走る」とあるが、この下邳は續漢書第二二郡國志によると、徐州に屬する王國の一つであるから、亂の起つた同年の中平元年に、その王が「國を棄てて」逃亡したという事實は、その當時すでに黄巾の勢力が徐州の中にまで入つていたということを證明する。要するに青徐の二州は擧兵の當初からすでに黄巾の一方の本據地であ

り、張角の死後も依然としてその性格を變えることなく、反亂の中心として強力な抵抗をつづけて行く重要な舞臺となるのである。^⑨

このような視點からあらためてその後の黃巾の動向を跡付けて行くと、青徐の二州がいかにその反亂の重要な據點であったかということがわかる。すなわち前に示したように舉兵後四年餘をへた中平五年（一八八）に「青徐の黃巾が復び興ると、以後その勢力は加速度的に強盛となり、初平元年（一九〇）には「青徐の士庶にして黃巾の難を避けて（劉）虞に歸する者百餘萬口」という大量の難民を發生させる有様となる。またその翌年には「青徐の黃巾三十萬衆」という大軍が「渤海の界に入る」という事態が起るが、その一部は公孫瓚らによって撃退されている。すなわち三國志魏書卷六袁紹傳所引の英雄記に「公孫瓚は青州の黃巾の賊を撃ち、大いにこれを破る」とあり、また同卷八公孫瓚傳に彼の從弟の範が「渤海の兵を以て（公孫）瓚を助けて青徐の黃巾を破る」とあるのがそれであるが、水經注卷九淇水清河の條を見ると、そのさいに敗北した黃巾の「斬首三萬、血を流して水を丹く」したと伝えられる。しかし別の一隊は同年の一月に「青州の黃巾」として再び「太山を寇」し、翌三年の四月には「青州の黃巾の賊は兗州に入り、任城相の鄭遂を殺し、轉じて東平に入り、さらにその東平で「青州の黃巾は兗州刺史の劉岱を撃殺」とするという猛威をふるう。それとほぼ同じころ一方では「たまたま徐州の黃巾起るや、（陶）謙を以て徐州の刺史と爲し、黃巾を撃ちて大いにこれを破走せし」めることになるが、亂の起った十二年後の獻帝の建安元年（一九六）になっても、徐州の黃巾は依然として猖獗をきわめ、青州東部にある「高密」の邊を往還していたことが知られる。

このように青徐の黃巾はただ單に州名を冠してよばれた事例ばかりではない。青州や徐州の黃巾と明記されてはいないが、その二州の中の郡縣に跳梁していた黃巾の例も數多く見出される。水經注卷八濟水の菅縣の條を見ると、そこに「黃巾固」とよばれる一郭があったことが記されているが、それは「蓋し賊の屯する所の故に、固として名を得たり」と説明されているように、元來は黃巾の屯所の一つであり、それに由來する地名であつたらしい。このように黃巾の名を冠する

地名が出現し、亂後もそれが存続していたということは、この地方に黃巾の勢力がいかに盛んであったかということを暗示させるが、その管縣は續漢書第二二郡國志によると、青州の濟南郡に置かれた縣の一つである。さらに後漢書卷六五鄭玄傳を見ると、この著名な後漢の大儒は「建安元年、徐州より高密に還る道に、黃巾の賊數萬人に遇う」ことになったとあるが、この高密とはいうまでもなく鄭玄の本貫であり、青州の北海國に屬する縣であるから、徐州から青州にかけて蟬集していた黃巾の勢力のほどが想像される。また同傳に「孔融は北海に在」って「黃巾の圍む所と爲」り、また同卷一〇〇孔融傳に「時に黃巾復た來りて侵暴するや、（孔）融乃ち出でて都昌に屯す」ることになったとあるが、この都昌もまた青州の北海國に置かれた縣の一つである。三國志魏書卷一一邴原傳を見ると、當時北海にいたかれはその孔融によって有道に推舉されたが、「遂に遼東に至」らざるをえなくなったのは、「黃巾のまさに盛んなるを以て」という理由からであった。これらの記事によって黃巾がいかにこの地方を中心に活躍していたかということが想像されるが、右の後漢書孔融傳に「時に黃巾は數州を寇するも、北海は最も賊の衝と爲る」と明記されていることから判斷するならば、黃巾の亂は「數州」にわたって盛んであったが、その中でも文字どおり「賊の衝」としてもっとも重要な據點となった地方が、北海國を中心とする青州一帯であったということができよう。

（二）青州の黃巾とその意義

後漢の崩壞はこのように青徐二州に頻發する黃巾の亂とともにその步調を早める。「青徐の黃巾が復び興」った同年の太平五年に八校尉の制度が創設されると、虎賁中郎將の袁紹が中軍校尉となり、議郎の曹操が典軍校尉となった。三國志魏書卷一武帝紀の末尾の贊文に、

漢末天下大亂、雄豪並起、而袁紹虎視四州、疆盛莫敵、太祖運籌演謀、鞭撻宇內。

と評されているように、ここに袁紹と曹操という後漢末期の政局を左右する「雄豪」が登場する。後漢書卷一〇四上袁

紹傳によると、「黃巾の十萬、青兗を焚燒す」という慘事をもたらしたために、袁紹は「辭を奉じて畔を伐つ」ことを上表したということが見え、また同卷八八臧洪傳によると、かれはその袁紹に「青州刺史を領す」ることを命ぜられたが、「時に黃巾の群盜處々に騷起す」る有様であつたという。そして同卷九獻帝紀と卷八五章帝八王傳中の濟南王傳を見ると、ついに建安一二年（二〇七）にいたつて、濟南王の劉贇が「黃巾の害する所と爲る」という事件が起る。この濟南は三國志魏書卷九夏侯淵傳に「濟南・樂安の黃巾徐和・司馬俱らは城を攻めて長吏を殺す」とあり、また同卷一八呂虔傳に「濟南の黃巾徐和」とあるように、獻帝の末期に徐和らを首領とする黃巾の一團が盛んに活躍していた地方である。そしてそれは既述のように張角の擧兵を密告した唐周の出身地であり、青州に置かれた郡國の一つであつたことはいふまでもない。その濟南王が黃巾によつて殺害されたということは、黃巾の亂が起つてすでに二十餘年をすぎたのちにも、その勢力がなお青州を中心に根強い抵抗をつづけ、ついにその地にある後漢の王族の一人を殺戮するまでに發展していたということを示している。

この事件は黃巾の亂を平定する能力が、もはや漢室それ自體には存在しえなくなつていたということを意味する。それに代つて登場し黃巾の鎮壓に成功した新しい代表者が、いふまでもなく漢末の群雄の一人であり、のちに魏の武帝となる曹操であつた。後漢書獻帝紀の初平三年（一九二）四月の條に、

青州黃巾擊殺兗州刺史劉岱於東平、東郡太守曹操、大破黃巾於壽張、降之。

と見えるように、曹操こそ「青州の黃巾」を「大破」することに成功した數少ない實力者の一人であつたが、その曹操が「自ら丞相と爲」つていよいよ漢室の一掃に着手しはじめるのは、濟南王劉贇が黃巾によつて殺害されたその翌年のことである。しかし曹操の成功の一因はいふまでもなくただ單に黃巾を潰滅に導いたという戦闘の勝利にのみよるものではなく、黃巾の殘黨を自己の軍團の中に從屬させ、その勢力の一角に利用したという戰略の効果によるものであつた。すなわち三國志魏書武帝紀の初平三年の條に、

追黃巾至濟北、乞降、冬受降卒三十餘萬、男女百餘萬口、收其精銳者、號爲青州兵。
と見え、また同卷一七于禁傳に、

未至太祖所、道見十餘人、被創裸走、（于）禁問其故、曰爲青州兵所劫、初黃巾降號青州兵、太祖寬之、故敢因緣爲略、禁怒令其衆曰、青州兵同屬曹公、而還爲賊乎、乃討之。

と見えるように、青州の黃巾の精銳部隊はのちに青州兵と名を變えて、曹操の軍團の中に再編成されたということが知られる。裴松之は右の武帝紀の建安五年（二〇〇）の條に注して、「魏武初めて兵を起せしとき、已に衆五千有り。自後百戰して百勝し、敗るる者は十に二三のみ。但し一たび黃巾を破るや、降卒三十餘萬を受く」云々と述べ、また清の何焯は青州兵の編入によって「魏武の強これより始る」と評しているように、のちに曹操が魏の太祖武帝というような強力な存在にまで發展しえた理由の一つは、黃巾の勢力を征討することに成功したと同時に、またその大軍の一部を自己の輩下に收容することができたからであつた。逆にいえば中平元年に起つた黃巾の亂は、後漢王朝を實質的に崩壞に導く大きな起爆劑の役割を演ずることになつたが、結局はそれに代つて出現した新しい主權者の支配體制の中に吸収されるという形で、二十餘年にわたる大規模な反亂の終止符をうつことになるのである。

以上周知のような黃巾の亂の始末を必要以上に縷述してきたのは、それが徐州の一部を加えた青州という山東地方を一つの地盤として起り、それを基礎に擴大して行つた反亂であるということを強調したいためにほかならない。既述のように張角らは中平元年二月に蜂起したが、同年の十一月にはすでに誅滅されてしまつてゐるから、冀州を本據とする黃巾の亂は實質的にはわずか十か月にも満たない短命な反亂であつたということになる。したがって張角らの反亂のみをとりあげて評價するならば、それ自體は後漢時代に起つた數多くの反亂と大同小異の規模のものであり、後漢王朝を滅亡させるほどの強力な動因とはなりえない脆弱な内容の反亂であつたといわなければならぬ。しかしこの亂を他の群小の反亂と相違させ、後漢王朝に潰滅的な打撃をあたえる大反亂たらしめた最大の要素は、これまでくりかえして述べてきたよう

に、ほとんど無名の指導者の下に結集しつつ、主として青州に雄據していた黄巾の存在であった。すなわち舉兵の當初から張角の死後二十餘年の長きにわたって抵抗をつづけてきたこの青州の黄巾こそ、黄巾の亂を名實ともに天下の大亂にまで發展せしめた實質的な原動力であった。小論が黄巾の亂を考察の對象とするさいに、徐州の黄巾を含めてとくに青州の黄巾を重視し、反亂全體の經過の中でその存在意義をあらためて指摘し評價する理由はここにあるのである。

以上のような論證の過程から次に當然派生する問題は、それでは青州とは一體いかなる州であり、その地方にはどのような傳統的な要素が存在し、それが具體的に黄巾の亂の中にどのような獨得の色彩や形態をあたえているか、などという點であろう。以下章をあらためて順次これらの問題を検討して行くことにしたい。

二 黄巾の亂と傳統の關係

(一) 青州の範圍とその傳統

青州は周知のように書經の禹貢に「海岱は惟れ青州なり」と記されているように、いわゆる傳説的な九州や十二州の一州にあたる。そして續漢書第二二郡國志を見ると、そこに屬する郡國の一つとして齊國が置かれていることから明らかに、青州は元來は齊に屬する地方であった。換言すれば、後漢時代の青州は、いわゆる春秋時代の五霸の筆頭であり、戰國時代の七雄の一國であった齊をその前身とする地方であったということである。この兩者の關連とその傳統の問題を考察するためには、本來ならばここでその先秦時代の齊と後漢時代の青州との領域を仔細に對比検討しておかなければならないが、紙數の關係からそれらについては最小限度の言及のみにとどめて、小論では以下その輪郭だけを概観しておくことにしたい。

史記卷二二齊太公世家の太史公の贊文を見ると、「吾れ齊に適きしが、泰山よりこれを琅邪に屬し、北は海にいたるま

で膏壤二千里」とあり、右に擧げた書經の鄭玄の注を見ると、「東北は海に據り、西南は岱に距る」とあるように、齊や青州の領域は一般に海濱と泰山とを基準として區分されたもののようである。もちろんその四圍の國境は最初から明確に規定されていたわけではなからうが、春秋時代の初期にはすでにその境界が意識されはじめたものらしく、春秋左傳の僖公四年（前六五六）の條を見ると、管仲の述べた齊の領域として、「東は海に至り、西は河に至り、南は穆陵に至り、北は無棣に至る」という一文が見出される。杜預はこれに注して「穆陵・無棣は皆な齊の竟なり」と述べているが、この南境の穆陵の所在については、のちの山東省臨朐縣の南方とする説と湖北省麻城縣の北方とする説の二説があって、そのいずれに比定するかということは必ずしも明らかではなく、また北界の無棣の所在についても、山東省陽信縣の東方の一縣に比定する以外、詳細はあまりつまびらかではない。しかし戰國時代に入るとその國境はかなり明瞭に主張されるようになったものらしく、戰國策卷四齊策上の宣王の條を見ると、

蘇秦爲趙合從、說齊宣王曰、齊南有太山、東有琅邪、西有清河、北有渤海、此所謂四塞之國也。

とあって、その領域の東西南北をそれぞれ琅邪・清河・太（泰）山・渤海の四方に置いていることが知られる。當時東岸の琅邪から泰山にいたる地點に長城が築かれたということは、この四方のうちの二方を結びつけることによって、南方にある楚などの諸國との境界を示したものであらう。漢代に想定された齊の範圍は基本的にはこの四方を踏襲したものであり、漢書卷二八下地理志の末尾に見えらるいわゆる分野説によると、それは次のようにやや詳しく説明されるようになっている。

齊地虛危之分野也、東有甯川、東萊、琅邪、高密、膠東、南有泰山、城陽、北有千乘、清河、以南渤海之高樂、高城、重台、陽信、西有濟南、平原、皆齊分也。

漢代の史料に散見する齊の領域はこれと大同小異であるが、先秦時代以降の齊の範圍は以上の記録によってほぼ明らかにすることができるように思われる。すなわちそれはまず北は黄河河口の南方にある渤海を起點とし、千乘をへて東向す

それではこの青州の地方には春秋戰國以來どのような傳統的な要素があり、それが黃巾の亂に具體的にどのような影響をあたえているであろうか。このような疑問に對して一つの興味ある示唆をあたえる問題は、黃巾の集團がその結束の紐帶として黃老信仰と游俠組織という二つの特色をもっていたという點である。

そのうち前者の黃老信仰に關連する問題として、筆者は以前に上掲の皇甫嵩傳に明記されている黃巾の起義の口號をとりあげ、その考證を中心に、この口號の意味について從來一般になされている解釋に對して一つの疑義を提起したことがある。^⑩ その黃巾の起義の口號とは、周知のように「蒼天已に死せり、黃天まさに立つべし、歲は甲子に在り、天下大吉なるん」という有名な標語であるが、これまでこのスローガンは一般に五行思想に立脚した表現であると考えられ、それによつて黃巾の亂は後漢を打倒し、それに代る新しい土德の天下を樹立しようとするわだたぬ反亂であると理解されてきている。しかし拙稿の提起した疑問は、蒼天に代る黃天という考え方は五行の相勝と相生のいずれの推移説にも該當することなく、また後漢は建國の當初から滅亡の寸前まで終始火德をたてて赤色を標榜していたことは疑いのないことであるから、少なくとも木德を意味する蒼天という表現それ自體は後漢を示す稱謂にはなりえないという點である。そしてこの分析の結果を前提とし、さらにこの起義の口號が句尾において押韻しているという事實を見出して、それらの證據を中心に「黃天泰平」という稱號、「中黃」という用語、「黃巾」という服色、「甲子」という觀念の四つの問題を取りあげ、それらを逐次検討した結果、黃巾の起義の口號の中に見える黃天という用語は、五行思想ではなく黃老信仰に立脚した獨自の表現であろうという結論に到達した。もちろんこの結論それ自體にも問題があり、詳細は後注に舉げた拙稿に對する批判をまたなければならぬが、皇甫嵩傳に「初め鉅鹿の張角は自ら大賢良師と稱し、黃老の道を奉事す」とあることから明らかにように、黃巾集團がその基本的な教義として黃老的な思想を信奉していたということは、あらためて指摘するまでもない周知の事實であろう。

黃巾集團はこのように黃巾信仰を母胎とする太平道の教團であつたが、また同時に增淵龍夫氏の研究によると、その教

團の組織には「一般民衆の内面の心をつかむ宗教的要因とならんで、少くともその組織幹部の間には、游侠の任俠的組織原理が入り交っていた」ということが明らかにされている。すなわちその指摘にしたがえば、黃巾は一方では黃老的な教義を崇拜する信徒の教團であり、また同時に他方では游侠的な結合を基盤とする流民の集團であったということになる。とするところできわめて注目には價することは、黃老信仰と游侠精神という二つの要素が、ともに齊を中心に發生したいわゆる土俗のような存在であり、しかもその兩者が地方的な傳統として黃巾の亂の上に濃厚に投影しているということなのである。

このような意味から齊と黃老思想との關係を考える場合に、もっとも注目される研究は郭沫若氏の「稷下黃老學派的批判」^④という論文である。郭氏の指摘によると、黃帝という名稱が史上最初に現われる史料は、次のような陳侯因資敦とよばれる金文であるといわれる。

唯正六月癸未、陳侯因資曰、皇考孝武桓公恭哉、大謨克成、其唯因資、揚皇考昭統、高祖黃帝、邇嗣桓文、朝問諸侯、合揚厥德、諸侯貢獻吉金、用作孝武桓公祭器敦、以蒸以嘗、保有齊邦、葉萬子孫、永爲典常。

ここにいる陳侯因資とは齊の威王のこととされているが、氏はその齊王が、「高くは黃帝を祖とし、邇くは桓・文を嗣ぎ、……齊邦を保有せり」と述べているのであるから、齊が黃帝を開祖として畏敬していたことは疑いないという。さらに氏はまた「黃老の術で私たちが注意してよいことは、それが齊に植えつけられ、齊で發育し、齊でさかんになったということである」^⑤などと述べ、黃帝崇拜やそれともなう黃老信仰がいずれも齊の地方に發生したということを指摘し、その地方的な特色や傳統的な要素を重視している。

事實このように黃老的な信仰が齊においていかに盛んであったかということは、史記卷二八封禪書とほぼその大部分を轉載する漢書卷二五郊祀志を一瞥しただけで十分であらう。秦の始皇帝や前漢の武帝の行った泰山封禪は、不死登僊という神仙思想にあこがれたものであるとされているが、その武帝が不老長生を求めたのは、「天子曰く『ああ吾れ誠に黃帝

の如くなるを得れば、吾れ妻子を去るを視ること、躡を脱ぐが如くならんのみ」と見えるように、その具體的な理想像を黃帝であると考えたからであり、その地に齊の泰山を選んだのは、そこが「黃帝の常に遊びて神と會せし所」であつたからである。またこの間に陰陽五行思想を最初に整備したとされる騶衍の傳統を受け繼いで、「燕齊海上の方士、……勝げて數うべから」ざる有様であつたが、武帝の封禪のさいに暗躍した巫祝や方士の徒は、「齊人少翁」をはじめとして公孫卿・申公・丁公などの多くはいずれも齊の出身である。その齊に屬する濟南の公玉帶は「黃帝の時の明堂の圖を上る」とあり、同じく膠東の樂大は武帝に「見えて數月にして六印を佩び、尊きこと天下に震」つたために、「海上燕齊の間、搯挽して自ら『禁方有り、神僊を能くす』と言わざるもの莫し」という狀況であつたという。「燕齊海上の方士、其の術を傳うれども通ずる能わず」といい、「海上燕齊の怪迂の方士、多く更にも來たりて神事を言う」といい、さらに「齊人の上疏して神怪奇方を言う者萬を以て數う」という一文などから推測するならば、齊が燕とともにいかに黃老神仙思想の風靡していた地方であつたかということが理解されるであらう。

このような齊における黃老神仙思想の流行は、ただ單に一部の方士たちのみによつて獨占されていたものではなく、いわばその地方の風俗として一般人士の間に深く浸透していたように思われる。史記卷五三曹相國世家を見ると、その片鱗を傳える次のような興味ある挿話が描かれている。

孝惠帝元年、除諸侯相國法、更以參爲齊丞相、參之相齊、齊七十城、天下初定、悼惠王富於春秋、參盡召長老諸生、問所以案集百姓、如齊俗諸儒以百數、言人人殊、參未知所定、聞膠西有蓋公、善治黃老言、使人厚幣請之、既見蓋公、蓋公爲言、治道貴清靜、而民自定、推此類具言之、參於是避正堂、舍蓋公焉、其治要用黃老術、故相齊九年、齊國安集、大稱賢相。

すなわち齊を治めるために丞相としてはじめて赴任した曹參が、その政策として「百姓の安集する所以を問う」たが、その發言が「人々殊なる」ために「未だ定むる所を知らず」という状態になつた。たまたま「善く黃老の言を治」めると

いう蓋公の意見を採用して「其の治要に黃老の術を用」いたところ、「齊に相たること九年、齊國安集して、大いに賢相と稱」されたという。もちろんこの挿話は秦の滅亡後の人心を收攬するためには、黃老的な施策が最適であるということをも物語ったものであろうが、それと同時に黃老思想が齊の地方においていかに盛んであり、いかにその地方の特色となっていたかという一面を暗示するものであろう。

齊は黃老の發生の地であると同時にまた游俠の誕生の地でもあった。この齊と游俠との關係を考える場合に、もっとも注目される研究は宮崎市定氏の「游俠に就て」という論文である。その指摘によると、游俠の「俠」字は古くは「鉞」とも書き、元來それは劍を示す文字であるが、管子問第二四や莊子雜篇卷三〇説劍や史記卷七五孟嘗君列傳などにその出典が求められることなどから推測して、「齊地方の方言であらうと思われる」と想定されている。周知のように史上最初に登場する游俠的な存在は、春秋左傳の魯の文公の一四年（前六一四）の條に、

商人驟施於國、而多聚士、盡其家貲、貸於公有司、以繼之。

と見える公子商人のことであるとされているが、この商人は齊の桓公の子でのちの懿公である。同じく左傳の昭公の三年（前五四〇）の條に見える田氏もまた游俠的な人物であるが、のちに齊を篡奪したことから明らかなように齊の出身であり、また戰國の四公子の代表ともいふべき孟嘗君は史記の同傳によると、「天下の任俠姦人を招致し、薛中に入れる」と六萬餘家」といふ聲望をもち、つねに「食客三千人」を養い、齊の相として名を遺したことは有名である。このような游俠的な氣風はとくに都市部において盛行していたものらしく、戰國策卷四齊策上の宣王の條を見ると、

臨淄甚富而實、其民無不吹竽鼓瑟、擊筑彈琴、鬪鷄走犬、六博踰鞠者。

とあって、齊の首都の臨淄には多くの無産無頼の徒が集り、連日弦歌や賭博の生活に明け暮れていた様子が活寫されている。史記卷九九貨殖列傳に漢代においてなす游俠の氣風の盛んであった地方として齊の名が擧げられているように、游俠的な精神もまた黃老的な崇拜とならんで齊を代表する二大特色の一方を形成していたといつてよいであらう。そしてその

特色を繼續發展させて、黃老的性格と游俠的な要素という二つの傳統が、黃巾の亂の上に大きな影響をあたえていることに注目されるのである。その問題をあらためて検討するために、まず黃巾の亂と關連すると思われる一二の先驅的な反亂について觸れておくことにしたい。

(二) 黃巾の亂に見られる地方の傳統

青州を基盤とした黃巾とその地に傳わる傳統の問題について検討するさいに、きわめて注目される存在は、王莽の新末から後漢のはじめにかけて亂を起した赤眉という集團である。その意味から後漢書卷四一劉盆子傳に見える次の一節は、黃巾の亂を考える上において非常に貴重な示唆をあたえてくれる。

天鳳元年、琅邪海曲有呂母者、子爲縣吏、犯小罪、宰論殺之、呂母怨幸、密聚客規以報仇、母家素豐、貲產數百萬、乃益釀醇酒、買刀劍衣服、少年來酤者、皆除與之、視其乏者、輒假衣裳、不問多少、數年財用稍盡、少年欲相與償之、呂母垂泣曰、所以厚諸君、非欲求利、徒以縣宰不道、枉殺吾子、欲爲報怨耳、諸君寧肯哀之乎、少年壯其意、又素受恩、皆許諾、其中勇士自號猛虎、遂相聚得數十百人、……後數歲、琅邪人樊崇起於莒、衆百餘人、轉入太山、自號三老、時青徐大饑、寇賊蜂起、群盜以崇勇猛、皆附之、一歲間至萬餘人、嵩同郡人逢安、東海人徐宣、謝祿、楊音、各起兵、合數萬人、復引從崇、……初崇等以困窮爲寇、無攻城徇地之計、衆既寢盛、乃相與爲約、殺人者死、傷人者償創、以言辭爲約束、無文書旌旗部曲號令、……王莽遣平均公廉丹、太師王匡擊之、崇等欲戰、恐其衆與莽兵亂、乃皆朱其眉、以相識別、由是號曰赤眉、……軍中常有齊巫、鼓舞祠城陽景王、以求福助、巫狂言景王大怒曰、當爲縣官、何故爲賊、有笑巫者輒病、軍中驚動。

この一文においてまず最初に注意されることは、この赤眉の亂もまた黃巾の場合と同様に、齊に發生していることである。すなわちその首領の呂母や樊崇の生地である琅邪は、さきに考證したように先秦時代には齊に屬する地方であ

り、漢書卷二八上地理志によると、前漢時代には景帝のころまでは齊國に屬し、續漢書第二一郡國志によると、後漢時代になって徐州に編入された地域であった。そして右の文中に「時に青徐大いに饑え、寇賊蜂起するや、群盜（樊）崇の勇猛なるを以て皆なこれに附す」とあり、また琅邪の逢安をはじめ「東海の人徐宣・謝祿・楊音」らが同時に擧兵してこれに参加したとあるが、この東海は上記の續漢書郡國志によると徐州に屬する郡であるから、赤眉の亂も黃巾の亂と同様に青徐二州を舞臺として展開した反亂であったということになる。

このように見てくるとここであらためて注目される問題は、この赤眉の亂の中にも游俠的な組織原理と黃老的な信仰形態が共存しているという點である。すなわち右の一文の中に「少年」という用語が三か所において見出されるように、赤眉の集團は少年を中心として結成されたものであるが、その少年とは游俠無賴の徒を指してよんだ秦漢時代の獨得の表現であることが明らかにされているから、赤眉もまた黃巾の場合と同様に、游俠的な結合の原理を基礎として組織化された集團であったことがわかる。そしてこれらの「軍中に常に齊巫有り」と記され、「巫を笑う者有らば輒ち病む」と述べられているのは、その軍團の中に文字どおり齊の巫祝が存在し、それらが隊内に重要な發言力をもっていたということを示すものであり、またその巫祝が「鼓舞して城陽景王を祠り、以て福助を求」めたと伝えられているのは、その反亂集團がなんらかの形で齊の民間信仰を母胎としていたということを物語るものである。ここにいう城陽景王は、應劭の風俗通卷九に「琅邪・青州の六郡より渤海に及ぶまで、都邑・郷亭・聚落、皆な爲に祠を立つ」とあり、また三國志武帝紀所引の魏書に「青州の諸郡うたたあい倣效し、濟南尤も盛んにして六百餘祠に至る」といわれているように、それは青州を中心とする地方に流行していた淫祀の一種であった。周知のように右の魏書の中に黃巾が曹操に宛てて送った手紙の一節が著録されているが、それによると黃巾は自らの信奉する太平道を城陽景王信仰と本質的に相違するものと見なしていたようである。しかし問題はそうした信仰對象の相違にあるのではなく、赤眉が齊巫を中心に青州に流行していた雑多な民間信仰を包攝していた集團であったということである。要するに赤眉は青徐二州を中心にした反亂であり、しかもそれは游

俠的な紐帶を基礎とし、巫祝的な信仰を母胎としていた集團であるという意味において、齊という地方の在地的な傳統色を濃厚に示している存在であつた。そしてそうした特色の一部はそのまま黃巾の特色ともなつて受け繼がれて行つたのであり、その意味から赤眉の亂は黃巾の亂の先驅的な存在であつたと考えることもできるであらう。

しかし黃巾の亂と共通した性格をもつ反亂は赤眉のみにとどまるのではない。さらに溯つて史記卷七七項羽本紀とそれを踏襲する漢書卷三一項籍傳を見ると、次のような興味ある記事に遭遇する。

陳嬰者、故東陽令史、居縣中素信謹、稱爲長者、東陽少年、殺其令、相聚數千人、欲置長無適用、乃請陳嬰、嬰謝不能、遂疆立嬰爲長、縣中從者得萬餘人、少年欲立嬰便爲王、異軍蒼頭特起。

この一文によると「東陽の少年」が「其の令を殺し、あい聚ること數千人」とあり、さらにその「少年は(陳)嬰を立てて便ち王と爲さんと欲す」とあるから、赤眉の場合の少年という用語から推測されるように、この蒼頭もまた游侠を中心として組織された集團であつたということが注意される。⁸⁾ここにいう東陽とは漢書卷二八上地理志によると、前漢時代には臨淮郡に置かれ、續漢書第二一郡國志によると、後漢時代には徐州に置かれた縣の一つであるから、この蒼頭もまた徐州を中心に發生した反亂であつたことになる。しかし東陽は同じく徐州に屬するといつても、それは淮水以南に位置する縣であるから、そのような地方までもいわゆる齊の文化圈の中に含めて、その傳統の系譜を求めるといふことはいささか牽強にすぎるのであらう。ここで注目される問題はそのような齊と蒼頭との直接的な關連ではなく、右の文中に見える「異軍蒼頭特起す」という最後の六字なのである。というのは裴駰の史記集解に引く應劭の漢書注解を見ると、

應劭曰、蒼頭特起、言與衆異也、蒼頭、謂士卒卑帛、若赤眉青領以相別也。

とあつて、蒼頭という名稱を右のように注釋しているからである。應劭はいうまでもなく風俗通や漢官儀などの著者として著名な後漢の大儒であるが、この場合とくにかれが重視される點は、後漢書獻帝紀の初平二年の條に、「青州の黃巾大

いに太山を寇す。太山大守應劭撃ちてこれを破る」と見えるように、應劭は太山大守として直接的に黃巾の亂に對處した数少ない學者の一人であつたことである。いわば黃巾の亂の實見者であるその應劭が「蒼頭とは士卒の皁巾して、赤眉・青領の以てあい別つが若きを謂うなり」と解釋し、蒼頭と赤眉とを同一の存在のように理解しているということ、は、同様な反亂集團を考える上にきわめて貴重な示唆をあたえるのではなからうか。すなわち赤眉の場合は「(樊)崇ら戰わんと欲するも、其の衆の(王)莽の兵と亂るるを恐れて、乃ち皆な其の眉を朱くし以てあい識別」したとあるが、應劭の解釋にしたがえば、蒼頭の場合もそれと同様に「衆と異なる」ことを目的に「皁巾」を着用したということになる。

このことは黃巾の場合を含めて次の二つの解釋を可能にするように思われる。その一つは蒼頭や赤眉のように色を冠してよばれた反亂集團は、いずれも五行思想などとはまったく關係のない存在であつたことである。事實、蒼頭の場合には特定の五行の交替を意識してその色彩を採用したわけではないらしく、また赤眉の場合も從來漠然と想定されてきたように、なんらかの意味において漢室との關係を示すためにその王朝の色である赤を標榜したわけではない。というのは呂母の場合は死罪に處せられたわが子に對する「報仇」を動機として舉兵し、樊崇の場合も「初め(樊)崇ら困窮を以て寇を爲す」とあるように、それらはいずれもその末期はともかく當初から王朝の打倒というような明確な意圖をもつて蜂起した反亂であるとは考えがたいからである。そしてそれを記録する後漢書の記事とそれを解釋する應劭の筆致が、いずれも赤眉が眉を赤く染めたのはただ單に他の軍團と識別するために採用した一時的な手段にすぎないと記述しているということは、それが單に反亂に對する爲政者側の記録であるからとのみ解釋するよりも、むしろそれをそのままの事實を直截に書き遺した史料として理解すべきであらう。したがって反亂集團の採用する色は他と即座に識別できるような華美な色彩であれば十分であり、その色彩自體には元來五行の配當のような思想的な意味はなかったと考えなければならない。後漢書卷四六劉禹傳を見ると、「今山東安んぜず。赤眉・青領の屬、ややもすれば萬を以て數う」とあるように、新末から後漢にかけて赤眉以外にも青領などのように色を冠してよばれる多數の集團のあつたことが注意される。また同卷一〇

一朱儁傳を見ると、

自黃巾賊後、復有黑山、黃龍、白波、左校、郭大賢、于氐根、青牛角、張白騎、劉石、左髭丈八、平漢大計、同隸掾
哉、雷公、浮雲、飛燕、白雀、楊鳳、于毒、五鹿、李大目、白繞、眭固、苦晒之徒、並起山谷間、不可勝數、其大聲
者稱雷公、騎白者稱張白騎、……如此稱號各有所因、大者二三萬、小者六七千。

とあって、後漢末期にも黃巾以外の各種の反亂集團が一定の色彩によって自稱したり命名されたりしている數多くの事例が見出される。それらの名稱の由來は「各々因る所有り」とされ、そこに赤をのぞくすべての五行の色が散見されるが、それらはいずれもなんらかの意味において五行の推移を意識し、それに配當される特定の色を重視して、それを自らの集團の特色としていたわけではない。

それと關連する第二の解釋は、ある集團が一つの反亂を起す場合には、なんらかの意味において特定の色を選び、それを徽章とすると同時に、またしばしば特異な扮装を採用するということである。すなわち蒼頭の場合に「異軍蒼頭特起す」として、そこに「異」と「特」の二字を強調している文章は、短文ながら寸時に形成された反亂集團が、文字どおり特異な様相をとっていたことを活寫したものである。同様に赤眉のように急遽編成された集團は、元來「文書・旌旗・部曲・號令なし」という状態であつたために、「(王)莽の兵と亂るるを恐れ」て、その眉を赤くするという獨特の風姿を採用したことになる。既述のように蒼頭も赤眉ともに少年とよばれる無産無頼の游侠を主體として結成された集團であつたから、かれらがなんらかの理由や動機によって亂を起す場合には、まず最初に直面する問題として急遽集團を編成しなければならない。そうしたさいに正式な徽章や旗幟をもたないかれらが自らの戰意と集團意識を高揚し、他の集團と區別するためにとりうる一つの手段は、獨得の色彩の衣裳を身につけてそれを誇示し目印とすることであつた。蒼頭と赤眉はその代表的な存在であり、後漢書に記録される反亂集團の中に色を冠してよばれる事例が多いという事實は、そのような集團蜂起の經緯を端的に證明するものであらう。しかもこのような傾向はただ單に後漢以前の時代に

のみ見られる特殊な現象ではなく、後世の紅巾や青幫などにまで一貫するいわば共通の態度であつたということを付記しておく必要があろう。

このように見てくるところで再び問題となるのは黄巾の存在である。すでに指摘したように黄巾は赤眉と同じく先秦時代の中國であつた齊の地方に發生した反亂であり、その地方の傳統である游侠的な秩序と黄老的な信仰に立脚して、その組織を形成し維持していた集團である。そしてそれは皇甫嵩傳に「事の已に露われたるを知り、晨夜救を諸方に馳せ、一時に俱に起つ」とあるように、豫定より以前に突如として舉兵を敢行しなければならなかつた。そのさい「皆な黄巾を著けて標幟と爲す。時の人これを黄巾と謂う」と記述する一文の筆致が、「皆な其の眉を朱くして以てあい識別す。これに由りて號して赤眉と曰う」と敘述する文章の趣旨と、他稱と自稱との相違はあるにせよ、ほぼ同様の意味をもって表現されていることに注意したい。すなわち張角らが黄巾を着用したということは、一面ではその集團が游侠的な結合關係を紐帶としていたために、同じくそうした性格をもっていた蒼頭や赤眉の場合と同様に、倉卒に軍團を編成するさいに獨特の裝束をまとうことによつて、後漢の軍隊と識別しなければならなかつたという事態を暗示させる。ちなみに皇甫嵩傳はこの黄巾を「また名づけて蛾賊と爲す」と記しているが、李賢の注によると「蛾」と「蟻」とは音通であるから、「蛾賊」とは「賊衆の多きを諺う。故に以て名と爲す」と解釋されている。しかし少なくとも漢代までの各史書類に記録されている大小さまざまな反亂を検證するかぎり、その勢力の強弱や人数の多寡によつて命名されたような反亂集團の例は皆無であるといつてよい。皇甫嵩傳によると「時の人これを黄巾と謂う。また名づけて蛾賊と爲す」と述べて黄巾と蛾賊とを對比して表現しているのであるから、續漢書第一七五行志所引の物理論に、

黄巾被服純黄、不將尺兵、肩長衣、翔行舒步、所至郡縣、無不從、是日天大黃也。

などとある狀景から推測するならば、蛾賊とは文字どおり一見黄色の蛾を思わせるような恰好で各地に跳梁していたという意味ではなからうか。いずれにせよ少なくとも右の物理論に見える描寫から判斷しただけでも、黄巾が當時いかに奇異

な風姿を採用した集團として、一般の人々の目に映っていたということが想像できるであろう。

しかし黄巾が蒼頭や赤眉と同じように游俠的な結合を機軸としていたとしても、それらと根本的に相違する點は、黄巾が擧兵する以前にすでに太平道とよばれる一種の祕密宗教結社を確立していたということである。それはすでに述べたように「黄老の道を奉事」する教團であり、またかれらの力説する黃天とはその黄老信仰に立脚する口號であつたらしい。とするならばかれらがその蜂起にさいして自らの色に黃を標榜したということは、蒼頭や赤眉のようにただ單に自他を區別するために華美な色彩を選んだということだけではなく、黃が黄老思想においてもっとも重要な色であり、その色を採用することによって自らの思想内容を代辯させることができると思ふべきであらうか。そしてその黃色を表示するためにそれを着色した一種の頭巾を採用したということは、蒼頭や赤眉と同様に當時の游俠集團が造次に軍團を編成するさいにとるいわば常套手段を踏襲したものであらう。約言すれば黄巾を着用したというその行爲の中には、「黃」は黄老の思想を表現し、「巾」は游俠の手段を意味する要素がこめられ、それらが「黄巾」の二字の中に端的に集約されているように思われる。そしてこれら二つの要素はいずれも元來は齊に發生した習俗であり、以後もそれらはその地方の傳統として連綿として受け繼がれ、黄巾集團の性格と組織の中に同時に結實することになったのである。

黄巾の亂を以上のように理解することができるならば、次に問題となることはそのような反亂の母胎となつた齊という地方は一體いかなる地域社會を形成し、その風土や習俗が漢代においてどのような狀況にあり、統一王朝の成立後いかにしてその地方的な傳統を維持することができたか、等々の疑問である。このような疑問は別に詳細に検討しなければならぬことであるが、漢書卷二八下地理志に見える次の一文は、前漢時代にも繼承された齊の遺風の一端を示しているように思われる。

初太公治齊、修道術、尊賢智、賞有功、故至今其士多好經術、矜功名、舒緩闊達、而足智、其失奢奢朋黨、言與行繆、虛詐不情、急之則離散、緩之則放縱、始桓公兄襄公淫亂、姑姊妹不嫁、於是令國中民家長女、不得嫁、曰巫兒、

爲家主祠、嫁者不利其家、民至今以爲俗。

ここにいう「太公」とは齊の始祖とされる太公望呂尙のことであるが、かれは史記齊太公世家によると「或いは曰く呂尙は處士なり、海濱に隱る」といわれているように、一面では隱逸的な閱歷を傳えられる人物であり、また「太公（齊）國に至りて政を修むるや、其の俗に因りて其の禮を簡にし、……而して人民多く齊に歸し、齊大國と爲る」と賞揚されるような存在であった。右の一文に見える「道術」や「經術」とはその太公望のような聖人の教えという意味であって、必ずしも黃老的な學問ということではないらしいが、太公望の治世以來漢代の「今に至るも」、その齊の地方にはなお周代の遺風が存續していたことが知られる。また桓公の兄の襄公が淫亂であったために、「國中の民家の長女」を結婚させることなく、「巫兒」と稱して一種の家祠に奉仕させていたとあるが、その風習は「今に至るも以て俗と爲す」という状態であったという。それと同時にその地方の人々は「閭達」にして「功名」を誇り、「朋黨」を結んで行動し、治政の緩急によって「離散」や「放縱」をつねとする氣風をもっていたとされている。またそこに「其の失」として「夸奢」や「虚詐」という點が擧げられているが、それらの性格は漢書卷三四韓信傳に「齊人は夸詐にして變多く、反覆の國」であると述べられている評價と一致する。齊のもつ思想的な傾向や世俗的な風潮が漢代においてもなお依然として有力であったということとは、このような斷片的な敘述の間隙にも窺い知ることができるのではなからうか。

黃巾の信仰の對象であった太平道は以上のような齊の地方的な傳統を繼承し、それを獨自に發展させた民間宗教であった。周知のように張角らの奉持したといわれる太平經は、後漢書卷六〇下襄楷傳に「太平清領書と號す。……後に張角頗る其の書を有す」と見えるように、太平清領書という道典をその前身としている。しかしその太平清領書もまたそれよりさらに溯ること約二百年前の天官歷包元太平經をその前身としているといわれる。逆にいえば張角にいたるまでの太平道の經典には、天官歷包元太平經から太平清領書をへて太平經にいたる系譜が想定されているのである。

その最初为天官歷包元太平經は、漢書卷七五李尋傳を見ると、

初成帝時、齊人甘忠可、詐造天官歷包元太平經十二卷、以言漢家逢天地之大終、當更受命於天、天帝使真人赤精子、下教我此道、忠可以教重平夏賀良、容丘丁廣世、東郡郭昌等。

とあって、前漢末期の成帝の時代に「齊人の甘忠可」という人物によって「詐造」された書であることがわかる。そしてその教義は夏賀良や丁廣世に伝えられたとされているが、漢書卷二八上地理志によると、前者の出身地である重平は渤海郡、後者の容丘は東海郡に置かれた縣であるから、それらはいずれも齊とそれに密接する地方であったということになる。すなわち太平道の經典として遵守された太平經それ自體が、このようにその來源を齊の地方に求めることができるのである。

さらにこの書の系統を引くといわれる太平清領書は、三國志吳書卷一孫策傳所引の江表傳によると、「道士の琅邪の干吉」が撰述した書であるとされ、また同傳に引用されている志林によると、

初順帝時、瑯邪官嵩詣闕、上師干吉所得神書、於曲陽泉水上、白素朱界、號太平清領道、凡百餘卷。

とあるように、後漢の順帝のころに「瑯邪の官崇」という人物によって朝廷に献上された道典であったことが知られる。これら二人の本貫である琅邪は上引の戰國策に「齊は、……東に琅邪有り」といわれているように、先秦時代の齊の東境の地であり、また赤眉の首領たちの生地であったことが想起される。そしてあらためて指摘するまでもなく、後漢時代には徐州の北端に置かれた郡國の一つとして、黄巾の亂の重要な舞臺となった地方であった。

このように天官歷包元太平經が「齊人」によって偽作され、その教説が同じく齊の人間によって維持され、のちに「琅邪」の干吉や官崇らの道士によって整備されているということは、その後身である太平經もまた齊の遺産の一つであったということの意味する。黄巾の亂と齊の地方との関係は、このような道教經典の傳承という側面からも明らかにしうることであるが、以上のように黄巾集團の根本經典とされる太平經が、齊の傳統を受け継ぎそれを發展させた經典であったとするならば、その歴史の性格や特色はそのまま黄巾の亂それ自體にあてはめて考えることができる。三國志魏書卷一二邢

順傳を見ると、黃巾の亂と當時の世相を評して「黃巾起りてより二十餘年、海内鼎沸し百姓流離す」と述べられているが、後漢時代に數多くの反亂が發生したにもかかわらず、黃巾の亂がこのような大亂に發展した理由の一つは、それが齊という先秦時代の大國の傳統を受け繼ぎ、それを發展させた反亂であつたからではなからうか。一面からいへば張角の出身地は鉅鹿であり、黃巾の最前線は冀州であつたが、その背後には齊の傳統と青州の領域が存在していたといつてよい。黃巾の亂はそのような春秋戰國以來の齊の歴史を背景とし、その地方の獨自の傳統を基礎としていたために、それが後漢末期の大小さまざまな反亂の中で、この亂をひとときわ強力な運動にまで高めうる重要な一因をなしたのであらう。そしてその地方の傳統が思想的、社會的にそれぞれ黃老と游俠の要素に集約できるとするならば、きわめて圖式的な結論ではあるが、黃巾の亂は一方では儒教という國家の正統思想から疎外されて、雜多な民間信仰の中に育たざるをえなかつた黃老思想と、他方では同様に一般人民から遊離して、つねに社會の底邊に棲息せざるをえなかつた游俠の徒を中心として起つた反亂であつたということになる。そしてそれらが後漢末期の政治の腐敗や社會の混亂に乗じてその間隙に連帶して姿を現わし、精神的、組織的にそれらを媒介とすることによって流亡農民を結集しつつ、その勢力を基盤として一齊に蜂起した反亂であつたということができよう。黃天はついに立つことはなかつたが、後漢は事實上それによって崩壊し、以後中國は三國から隋初にいたる長い分裂の時代を迎えることになるのである。

おわりに

以上に詳述してきたところを要約すると、小論はまず最初に黃巾の亂の起つた地域を再検討し、それが實質的な意味の天下の大亂にまで發展して行つたのは、青徐二州を中心とする山東地方に活躍した黃巾集團の存在であつたことを確認し、次にその集團の性格と組織とを吟味することによって、黃巾は黃老信仰を精神的な母胎とする教團であつたと同時に、また游俠組織を結合的な原理とする集團であつたということを觀察した。そしてそこから逆に溯つて赤眉の例などを

検討した結果、實はその兩者の要素こそ青州の前身である齊の傳統であり、それらがのちに黃巾を着用するという擧兵のさいの行動の中に同時に具現したものであると考えた。また同時に太平道の經典とされる太平經の傳承の間にも齊の要素が介在していることに注目して、そのような先秦時代の大國の傳統が黃巾の亂の中に投影し、それを側面から發展させる原動力となった、などということを論證しようとした。もちろん以上の論證の過程には理論的にも實證的にも不備や誤解が少なくないであろうが、小論がこのように黃巾の亂を齊という一地方のもつ傳統の問題と關連づけて再検討しようと試みたのは、そこに今後の研究方法に對する一つの指針が模索されるのではないかと考えたからである。最後にその方法論を略述して結語に代えることにしたい。

黃巾の亂に關してこれまで數多くの研究が世に問われているが、この亂をめぐるいくつかの本質的な問題についてはなお不明の分野が少なくない。たとえば黃巾と五斗米道との關係、起義の口號の意味、現本太平經の史料的真偽、張角といわゆる黨人や宦官との關連、等々いくつかの問題がただちに想起されるはずであり、また小論の中では全く觸れえなかつた黃巾と豪族や農民との關係についても、なお多くの検討すべき問題が残されているように思われる。このように黃巾の亂に關する基本的な諸問題が今日まで必ずしも十分に究明されていない最大の原因は、すでに述べたようにこの亂に關する史料が多分に貧弱であり、その史料内容もそれと相對的に皮相であるという理由によるからであるが、黃巾集團のもつ一種の祕密結社的な性格やそれらを記録する支配者側の史料としての限界から、そのような制約はある意味では當然のことであり、今後もその制約から解放されるということはほとんど期しがたいといつてよい。このような状態にある場合、ある特定の時代の反亂をそれとは同時代の史料によってのみ考證するのではなく、そうした當該時代を一時的に止揚して、それを没時間的に追求するということとは不可能であらうか。

小論は黃巾と赤眉との關係を考察したさいに、赤眉によって黃巾を類推すると同時に、また逆に黃巾によって赤眉を分析しようと試みた。このように黃巾の亂を時代を溯って検討することができるとするならば、逆に時代を下ってそれを追

求することも必ずしも不當ではないはずである。^③ その意味からいくつかの後世の主要な反亂を展望して、その反亂の舞臺となった地方やその集團の性格などから推測しただけでも、黄巾の亂はさらに下って唐末の黃巢から元末の紅巾をへて清末の義和團にいたるまで、その傳統の足跡をたどることができるかも知れない。もちろん表面的な對比や短絡的な發想は十分にいましめなければならぬが、そうした一連の系譜を想定した上で次に個々の反亂を分析することによって、逆に黄巾の亂それ自體を究明する場合に貴重な示唆がえられるのではなからうか。この研究はそのような方法論に對する一つの試論である。

注

① 黄巾の亂を對象とする從來の研究については、拙稿「黄巾の亂と起義の口號」(『大正大學研究紀要』第五九輯、一九七四年)の末尾の注(1)に列記しておいたので、詳細はそれにゆすり、ここではそのさいに書き落した論文やその後に表示された研究のみを年代順に整理して追記しておく。

一、喻松青「太平經和黄巾的關係」和熊德基同志商榷」(『新建設』一九六三年二號) 二、同右「道教の起源和形成」(『歷史研究』一九六三年五號) 三、内山俊彦「漢代思想史における異端的なもの」(『山口大學文學會誌』第一七卷第二號、一九六七年) 四、松崎つね子「後漢末の宗教的農民反亂——黄巾の亂と五斗米道」(『駿臺史學』第二九號、一九七二年)

五、木村正雄「黄巾の叛亂」(東京教育大學文學部「史學研究」第九一號、一九七三年) 六、牧野晶子「後漢末道教運動研究の諸問題——その宗教性と政治性」(『名古屋大學東洋史研究報告』第二號、一九七三年) 七、川勝義雄「中國前期の異端運

動——道教系反體制運動を中心に」(會田雄次・中村賢二郎編『異端運動の研究』所載、京都大學人文科學研究所、一九七四年) 八、松崎つね子「黄巾の亂の政治的側面——主として宦官との關係からみて」(『東洋史研究』第三二卷第四號、一九七四年) 九、鈴木中正「漢・魏革命と黄巾草」(同氏著『中國史における革命と宗教』所載、東京大學出版會、一九七四年) 一〇、福井重雅「黄巾集團の組織とその性格」(『史觀』第八九冊、一九七四年)

② 以下本文で引用する後漢書^④一〇一皇甫嵩傳の史料批判については、右注の一〇に擧げた拙稿を参照。

③ その代表的な例が右注の五に擧げた木村氏の論文である。氏はその中で「黄巾の叛亂は中平元年(一八四)末を境として、前期と後期とに區別される。前者の黄巾は、張角を總帥とし、あらかじめ整然と組織されていた太平道を信仰する集團の叛亂であり、後期黄巾の叛亂は、必ずしも太平道とは關係なく、他

の一般の農民叛亂とはとんどこかわらなかった」(二頁、圈點は木村氏)と述べられている。もちろん單に反亂ばかりではなく、あらゆる事件というものは、その發生から結末にいたる過程においてさまざまな變化や進展を示すものであるが、氏のいうように張角の死を契機として黃巾の亂の性格が大きく變化したということは、ほとんど考えがたいことである。それを裏付けるに足るいくつかの反證的な史料があるが、ここでは一切省略する。

④ 黃巾の亂の地理的な分布については、宮川尙志「黃巾の亂より永嘉の亂へ」(同氏著『六朝史研究—政治・社會篇』所收、日本學術振興會、一九五六年)に付載する「黃巾の亂關係圖」(一二頁)および漆俠他「有組織有準備的黃巾農民戰爭」(同氏他編『秦漢農民戰爭史』所載、三聯書店、一九六二年)の挿圖「東漢末年農民戰爭形勢圖」(一二八頁後)が參考になる。

⑤ 後漢時代に胥徐二州の地方がしばしば反亂の中心となったということについては、多田狷介「黃巾の亂前史」(『東洋史研究』第二六卷第四號、一九六八年)において、豪族や農民などとの關連において考察されている。

⑥ 青州の黃巾と曹操の軍國との關係については、川勝義雄「曹操軍國の構成について」(『京都大學人文科學研究所創立二十五周年記念論文集』所載、座右寶刊行會、一九五四年)、五井直弘「曹操政權の性格について」(『歴史學研究』第一九五號、一九五六年)、好並隆司「曹操政權論」(岩波講座「世界歴史」五「東アジア世界の形成」Ⅱ所載、岩波書店、一九七〇年)などの研究がある。また郭沫若他編『曹操論集』(三聯書店、一九

六〇年)には、羅燿九「關於曹操打黃巾的意見」をはじめとして黃巾と曹操をめぐる五篇の論文が收録されている。

⑦ 青州と徐州は、木村正雄「中國古代帝國の形成——特にその成立の基礎條件」(不昧堂書店、一九六五年)によると、そのほとんどがいわゆる第二次農地に屬する地方である。このような國家權力に依存する率が比較的高い郡縣に、その地方の傳統的な要素が残存するということは、そこからさまざまな重要な問題を派生させるが、そのような側面の問題については別にあらためて考える機会をえたい。

⑧ 『左氏會箋』上(漢文大系本)第五(富山房、一九一一年)を參照。

⑨ 漢代の史料の中で齊の境域を示す正史の史料としては、他に史記卷三二齊悼惠王世家、同卷九九貨殖列傳、漢書卷二五上郊記志、同卷五七司馬相如傳所收「子虛賦」などが挙げられる。このうち最後の「子虛賦」は、文選卷四賦丁敞獵上にはほぼそのまま轉載されている。

⑩ 注①に引く拙稿「黃巾の亂と起義の口號」を參照。

⑪ 增淵龍夫「漢代における巫と俠」(同氏著『中國古代の社會と國家』所收、弘文堂、一九六〇年)を參照。

⑫ 同右論文(一一頁)から引用。

⑬ 郭沫若『十批判書』(群益出版社、一九五〇年)所收。その邦譯として「稷下の黃老學派の批判」(野原四郎・佐藤武敏・上原淳道譯『中國古代の思想家たち』上巻所收、岩波書店、一九五三年)がある。

⑭ 右注に引用する邦譯によると、「陳侯因資とは齊の宣王のこ

とである」(二二七頁)とされているが、原文によると「陳侯因胥就是齊威王」と明記されている。

- ⑮ 右注の邦譯(二二八頁)から引用。原文は「黃老之術、值得我們注意的、事實上是培植於齊、發育於齊、而昌盛於齊」である。

- ⑯ 封禪説を中心として黃老・神仙・巫祝・方士などの問題を究明した論文としては、福永光司「封禪説の形成——封禪説と神僊説」(『東方宗教』第六號、一九五四年、第七號、一九五五年)があり、それらの形成と齊との關連についてすぐれた考察が見られる。

- ⑰ 栗原朋信「秦の郊祀と宗廟の祭祀」(同氏著『秦漢史の研究』所收、吉川弘文館、一九六〇年)を參照。

- ⑱ 以上の齊と方士などとの關係については、聞一多「神仙考」(『聞一多全集』一所收、開明書店、一九四八年)や顧頡剛「秦漢的方士與儒生」(群聯出版社、一九三五年)所收のいくつかの論文などがあるが、とくにこの地方と黃巾との承諾を究明したもつともすぐれた論文として、陳寅恪「天師道與濱海地域之關係」(『陳寅恪先生文史論集』上卷所收、文文出版社、一九七二年)がある。

- ⑲ 宮崎市定「アジア史研究」第一(東洋史研究會、一九五七年)所收。

- ⑳ 同右論文(一一三頁)から引用。

- ㉑ もちろん同様に赤眉として一括するとはいへ、呂母の集團と樊崇の集團とは元來は別個の存在のようであるが、從來の研究によると、その組織や性格には多分に共通する要素があったと

されているから、ここではそれらをほぼ同一の集團であるとしてとりあつかうことにする。赤眉の亂とそれに關する若干の研究については、土屋紀義「一世紀前半の民衆叛亂に關する若干の問題」(『青年中國研究者會議編「中國民衆反亂の世界」』所載、汲古書院、一九七四年)とその各注に引用されている論文を參照。

- ㉒ 增淵龍夫「漢代における民間的秩序の構造と任俠的習俗」(同氏前掲書所收)を參照。

- ㉓ 赤眉と城陽景王の信仰については、志田不動鷹「赤眉と城陽景王祠との關係」(『歴史教育』第五卷第六號、一九三六年)を參照。

- ㉔ 蒼頭とその性格については、志田不動鷹「漢代の奴隸制度——蒼頭——について」(『歷史學研究』第二卷第一號、一九三八)や宇都宮清吉「漢代蒼頭考」(同氏著『漢代社會經濟史研究』所收、弘文堂、一九五五年)などの論考がある。

- ㉕ ここに赤眉と併稱されている「青領」とは、恐らくそれと同じころに擧兵した「青嶺」のことであろう。とするならば説文や釋名によると、「領」とは「くび」や「えり」という意味であるから、この一文は青嶺もまたその起義にさいして、特殊な扮装をまとったということを證明する史料となる。

- ㉖ 酒井忠夫「方術と道術」(東京教育大學東洋史學研究室編『東洋史學論集』所載、清水書院、一九五三年)を參照。ただし後漢時代の道術の字義については、宮川尚志「道教教團の源流」(同氏著『六朝史研究——宗教篇』所收、平樂寺書店、一九六四年)の注(5)には、これと多少相違した解釋が見られる。
- ㉗ 漢代の史書に散見する「詐」や「黨」の用語については、増

究會編『中國古代史研究』所載、吉川弘文館、一九六〇年）を参照。

㉔ 福井康順「太平道」、「太平經」（いずれも同氏著『道教の基礎的研究』所收、理想社、一九五一年）を参照。

㉕ これらの問題は黄巾の亂の研究史を整理した上で、あらためてそれらの問題点を摘出しなければならないが、最後に挙げた張角といわゆる黨人や宦官との關連という問題が、今日もっとも多くの論議の集中している分野である。そのうち注①の八に挙げた松崎氏の論文は、その副題が示しているように、宦官がなにゆえ黄巾と結託したかという理由を主として宦官の側から

問題は、逆に黄巾は宦官と連帶することによっていかなる社會の實現を願望していたかという點を研究することではなからうか。後考を期待したい。

㉖ この意味からもっとも注目される研究は、注⑧に挙げた陳寅恪の論文である。氏はその論文の中で、燕齊などの「濱海地域」と神仙道術との關係を重視し、「故漢末黄巾之亂、亦不能與此區域無關繫」（一四二頁）と述べ、さらに下って「抱朴子之學、雖有異於黄巾米賊、然實亦與之同出一源、不過流派略別耳」（一六九頁）と評し、その系譜を六朝末期まで跡付けている。

Some Remarks on Local Tradition as Seen in the Yellow Turban 黃巾 Rebellion

Shigemasa Fukui

The author in this article investigates the relationship between the rebellion of the Yellow Turbans (Huang jin 黃巾) and certain local traditions during the Later Han dynasty. After reexamining the regions where the rebels originated, he concludes that although the native place of Zhang Jiao 張角, the chief leader of the rebels, was Zhu-lu 鉅鹿 county in Ji-zhou 冀州 province, the rebels based in such provinces as Qing-zhou 青州 and Xu-zhou 徐州 on the Shandong peninsula were the mainspring of the uprising, which they transformed into a great revolt which led to the collapse of the Later Han.

On the basis of these findings, the author takes another look at the structure and characteristics of the Yellow Turbans, and argues that they combined the aspects of a religious order based on Taoist (Huang-Lao 黃老) beliefs with those of a group of “knight-errant” (*you-xia* 游俠) style adventurers. By tracing the background of the rebellion back to the time of the Red Eyebrows (chi-mei 赤眉), the author further demonstrates that these two features were linked to the local tradition of Qing and Xu provinces and indeed went back to the state of Qi 齊 in the Warring States period. The decisions to adopt yellow as their symbolic color and to wear “turbans” were connected with the local traditions of the Qi cultural zone. Comparable phenomena could, it is concluded, be turned up for rebellions in later periods as well.